

## 2 旧制高校外国人講師関係

### 旧制高等学校講師エーバースマイアーの見た四国

依岡隆児

#### 1. はじめに

第二次世界大戦直前の四国に滞在して、四国について文章を残しているドイツ人がいた。残念ながら、外国語で書かれ外国で出版されていたため、地元の人はその内容を知ることではなく、またその「記憶」は四国において戦後になっても顧みられることもなく、歴史に埋もれてしまった。だが、彼らの残した文献は戦前の四国を外からのまなざしで記録したものとして貴重である。そこでここでは、戦前の四国を異文化から照らし出す役割を果たした一人として、旧制高知高等学校に講師として赴任していたベルント・エーバースマイアーを取り上げて、そうした記録と記憶を掘り起こし、いまだ私たちの知るところとはなっていない四国を見ていきたい。

エーバースマイアーは日独同盟下の時代に来日したために、微妙な立場に立っていた。彼自身、四国・高知での数年間、ナチス信奉者を装う公の顔と、四国の民衆文化に関心を寄せるリベラルな側面とを併せ持っていた。ところが、日本でエーバースマイアーについて取り上げられた文献としては、荒井訓「終戦前滞日ドイツ人の体験（4）—『終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査』<sup>1</sup>と上田和夫・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』<sup>2</sup>におけるインタビューの記録があるだけで、その文献的掘り起こしは不十分である。本論は、旧制高知高等学校同窓会誌や彼が戦後、書き残した文献（ポッフム大学日本学科の論集<sup>3</sup>など）をもとに、ドイツの知識人がこの時代をどのように生きたか

<sup>1</sup> 荒井訓「終戦前滞日ドイツ人の体験（4）—『終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査』、『文化論集』第17号、2002年。この論文はFranziska Ehmke und Peter Pantzer in Zusammenarbeit mit dem Japanischen Kulturinstitut Köln (Hg.): *Gelebte Zeitgeschichte: Alltag von Deutschen in Japan 1923-1947*. München (Iudicium) 2000. を元にしてている。

<sup>2</sup> 上田和夫・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』集英社（新書）、2003年

<sup>3</sup> エーバースマイアーの *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung* における著作一覧

Bd. 8 1985: Bernd Eversmeyer: *Japan nach Kapitulation. Eindruecke and Begegnungen aus den Jahren 1945-47*

Bd.5 1982: Bernd Eversmeyer: *Ein Besuch bei Tanabe Hajime. Briefe an einen Ungenannten*, Karuizawa, den 8.8. 1959

Bd. 7 1984: Bernd Eversmeyer: *Deutsche Kulturtaetigkeit in Japan 1939-45. Persoenliche Erinnerungen*

を検証しながら、彼の視点から当時の四国の姿を明らかにすることを目的とする。

## 2. 旧制高知高等学校のドイツ人講師たち

四国で二つ目の高等学校として 1922 年に設置され、翌年最初の入学生を迎えた旧制高知高等学校には、ドイツ人講師がいた。ドイツ語を教え、ドイツの文化を伝えた。歴代のドイツ人講師は以下の通りである。

ブラッシュ、フリッツ S. 大正 13 年 4 月～大正 14 年 3 月  
ボナー、ヤーコプ G. 大正 14 年 4 月～昭和 3 年 4 月  
ヴェーデル、マックス 昭和 3 年 4 月～昭和 6 年 3 月  
コンラディー、アレキサンダー 昭和 6 年 4 月～昭和 13 年 3 月  
ビンケンシュタイン、ロルフ 昭和 13 年 9 月～昭和 14 年 1 月  
エーベルスマイアー、ベルント 昭和 14 年 1 月～昭和 16 年 11 月  
クリストファース、ジークフルート 昭和 16 年 11 月～昭和 20 年 5 月  
(旧制高知高等学校同窓会『会員名簿』第 24 号、2002 年より)

ドイツ人講師は、これによると、計 7 名いた。このうち初代のフリッツ・ブラッシュは第三高等学校から高知高等学校に赴任してきて 1 年を過ごしている。彼には日本人の妻とついでに 6 人の子供がいて、その中には後に禅画の研究で知られるクルトもいた<sup>4</sup>。クルトは高知に来て、城東中学校に通っていた<sup>5</sup>。

旧制高知高等学校同窓会『旧制高知高等学校五十年史』(1972 年)に寄稿した玉林憲義(2 回文乙)の「高知高校ゲルマニスト人脈」でもブラッシュについて触れている、「ドイツ人の先生の初代はフリッツ・ブラッシュ先生で、三高で長くおつとめになった後で高知へきて下さった。老練な先生でわたしたちはアメリカ版のドイツ語入門を習った。アメリカの少年が父祖の郷里であるドイツへ旅行して、ベルリンをはじめ各

---

Bd. 13 1989: Bernd Eversmeyer: "Ein Gefaerlicher Herr". Sugawara no Michizane im Urteil eines Zeitgenossen und in spaeterer Sicht.

Bd. 15 1991: Bernd Eversmeyer: Der Taifun und die Nichtsnutzigkeit der Propaganden

なお、エーバースマイアーの東京独逸学園時代については、Nachricht vom Tod des früheren Schuldirektors der Deutschen Schule. In: Tokyo aus "Freunde", Juni 1998. がある。

<sup>4</sup> 参考、クルト・ブラッシュ『禅画』二玄社、1962 年、クルト・ブラッシュ『禅画と日本文化』木耳社、1975 年。このうち『禅画と日本文化』には「秘仏」(初出、『銀弥会月報』第 5 号 1973 年 1 月)が再録されていて、高知の竹林寺の文殊菩薩について述べている。またクルトの追悼文集『ブラッシュさん』(ケー・ブラッシュ商会、1974 年)には、高知時代の一家の記念写真が載っている。

<sup>5</sup> 旧制高知高等学校 50 年史『高知、高知、あゝ我母校』旧制高知高等学校同窓会、1972 年、468 頁

地をめぐるテーマになっていたが、ドイツ語とドイツの事情がよくわかる本で、英語をまじえてたくみに教えてくださった。先生は高知を去って京都に戻られ、銀行パニックで貯蓄を失われたので帰国されず、京都でなくなられた。しかし先生の息子さん達は現在日本やスイスで貿易業界に活躍しておられ、兄さんの方は東京に住んで禅画についての立派な専門書を刊行せられた。弟さんは城東中学生としてボートを漕いだりしていたが、旧制大阪工大を出てスイスのユーバーゼー・ハンデルという日本の名誉領事館にもなっている機械関係の貿易社に技術営業員としておられる」（同書、469頁）とある。

この当時のその他のドイツ語講師について、同書の同窓会誌からその姿を拾ってみよう。「荘直一先生は立派な語学の先生だった。独作文を習ったのだが、テキパキと誤りを指示されて授業に活気があった。先生の編まれた語学教科書は数も多く、後年、大いに学恩をうけたものだ。東大の入学試験をドイツ語で受験するものにとっては先生はまことにありがたい救いの神だった。水戸にお移りになってからは参考書も多く書かれたので、全国の大学受験には親しまれた名前でもあった」（同書、467頁）。初代ドイツ人ブラッシュと二代目ゴットロープ・ボーナー（ボーネル）がいた頃の日本人のドイツ語教師が、この荘直一だった。彼は後に水戸高等学校に転任した。ちなみに荘については、ゴットロープが『私の一年』の中でも触れている。そのゴットロープについて同書の同窓会誌ではこう述べられている。

「第二代目はヤコブ・ボーネル先生で第一次欧州大戦に将校として参加された経験もうかがった。先生はドイツへ帰られて教育行政家としての功績をつまれば高い官位をえられた。そのご兄弟は大阪外大に永い間おつとめで、日本研究の著書が多く、『神皇正統記』その他の翻訳も出しておられた。もうひとりのご兄弟は松山高校におつとめでこの方も日本語に堪能でわれわれの学生のころにでた『精神作興に関する詔書』のドイツ訳をいち早く雑誌に発表されておられた。そしてこのご兄弟が日独戦争の捕虜として日本にこられ、それがご縁で、ヤコブ・ボーネル先生も来日されたということであった。ご郷里は西独のビルケンフェルトで高知高校の卒業生がそこをお訪ねした記事がいつかの同窓会誌にのっていた」（同書、468～469頁）。

これによると、ゴットロープ・ボーナーは、板東俘虜収容所を出た後も日本に残り日本研究者となっていた兄のヘルマンに呼ばれて来た。弟のアルフレートは松山高等学校に勤めていた。故郷はビルケンフェルトで、ゴットロープはドイツに帰ってからは教育行政家となった。その彼のもとに戦後、高知高校の卒業生が訪ねて行ったこともあったという。

ボーナーが寮歌を独訳したエピソードも紹介されている。

#### 校歌の独乙語訳について

この校歌は同窓会員が愛唱する歌であるが、大正11年開校以来昭和5年に至るま

での間、独乙語教師として講義された Jacob G. Bohner 先生は親日独乙人として、よく日本語と日本精神を理解せられ、われわれの独乙語を真剣に授業され、そのポーネル先生はまた歌曲がお好きで、いろいろ独乙のリードを聞かして頂いたが、或る日黒板に校歌の独乙訳を書かれ、われわれ生徒は喜んで覚え歌ったのである。大正末期から昭和初期の母校草創期における独乙語時間の一風景として残しておきたい次第である。(玉林憲義校閲)

Wo der Freiheits-Himmel gränzt,  
Am dem nahen Südsee-Strand,  
Ewig wälzt die Woge sich,  
Mit erhabenem Klang,  
In des ew'gen Sommers-land,  
Fließt die wackern Gottes-blut,  
Durch die Adern seiner Sohne,  
Frisch und freudig immerdar.

(同書、474 頁)

ここではポーナーがいたのは「大正 11 年開校以来昭和 5 年に至るまでの間」とされているが、実際は「大正 14 年以来昭和 3 年に至るまでのあいだ」である。この寮歌のことはポーナーの『日本の一年』の最後でも触れられている。

同書の同窓会誌の第二回生座談会「思い出すまま」にも、ポーナーのことが書かれている。

如何にもオックスフォードかケンブリッジ出身の英国紳士らしく、黒い長いガウンを着て講壇に立ったバツティ・スミス先生。イギリス人のスミス先生とは対照的に野性的であり、庶民的であって、教室で時々ハモニカを吹くこともあるドイツ人のヤコブ・ゲ・ポーネル先生。(同書、487～488 頁)。

バツティ・スミスは英語の教師で独身だった。外国人宿舎にポーナーの隣に住んでいた。彼がイギリス紳士然としていたのに対して、ポーナーの方は音楽のたしなみがあり、教室でよくハモニカを吹いていたという。高校ではポーナーは「ポーネル」と呼ばれていた。庶民的で親しみの持てる性質だったようだ。

さらに同同窓会誌の「四回生のクラスの窓より」にも彼は登場する。

外人教師は理甲は一年生で英語をバツティ・スミス先生、二年生では独逸語はポーネル先生であった。鼻下髭を残して、キレイに剃り上げ、赤ら顔で大男のスミス先生が黒いガウンを着て、如何にも英国紳士でありながら不作法にも教卓に横に腰

掛ける癖のあったのは、日本人の椅子が低すぎたせいであつたろう。頬髯に埋れた、むしろ小柄で田舎の好々爺の様なボーネル先生が、最初の授業に、いきなり『アー、ベー、チェー』の歌を大声で歌ったのは度肝を抜かれた。英国人とゲルマン人の氣質が窺える様に思えた。理乙組の独逸語は、二年、三年ではヴェーデル先生であつた。二人とも、よくフォルクスリードを教えてくれた。ヴェーデル先生は都会の青年紳士の様で、ヘル・レーラーと呼ぶと機嫌が悪く、ヘル・プロフェソールと言ひ直させられた。(同書、489頁)

ボーナーはやはり歌を歌っている。後任はヴェーデルだったが。彼も歌を歌つたようだ。こうしたイギリスとの対比では素朴なドイツ人のイメージがきわだってくる。

ヴェーデルは「若くて美男」だったため、生徒に人気があつた。生徒に「美しいドイツを夢見させ、ドイツマニアに仕立てた一人」(野本一雄「ドイツマニア夫婦」<sup>6)</sup>)だったという。『南溟』第3号(1976年)の西内巖「ヴェーデル夫人の手紙」によると、戦後ベルリンにあったヴェーデル宅に昔の教え子たちが訪ねてくると、彼はたいそう喜んだという。夫人の手紙にも彼は「日本と日本人をこよなく愛して」いたと書かれていた。

それに対して、「コンちゃん」と呼ばれた同じ高知高校のコンラーディは六十歳に近い年配で、1931年から1938年まで在職した。ドイツでは社会民主党員として党中央機関紙『フォアヴェルツ』などに論文を書くなど、政治活動をした人だ。やはり生徒たちに親しまれたようで、当て字で「昆羅寺」とも呼ばれた。著書にマルクス『フランスの内乱』の改訂版や、『ヨルク将軍』がある。(伊東勉「昆羅寺さんのはなし」<sup>7)</sup>。

## 2. エーバースマイアー

この旧制高知高校の六代目ドイツ人講師となつたのが、エーバースマイアーである。ベルント・エーバースマイアー(Bernd Eversmeyer, 1906~1998)は、ヴェストファーレン州ビーレフェルト生まれで、1939年から1941年まで、DAAD(ドイツ学術交流会)派遣で、旧制高知高等学校ドイツ語教師、1941年から1945年まで京都の独逸文化研究所所長を務めた。1947年から1957年まで帰国、1957年から1965年まで再来日、東京独逸学園校長を務め、1965年帰国し、1971年からボッフム大東亜科学研究室で日本学を専攻する。1987年、高知高校創立六十五周年記念祭で再来日、徳島経由で帰っている。

1989年にBochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung. Bd. 13に発表している“Ein Gefährlicher Herr”. Sugawara no Michizane im Urteil eines Zeitgenossen und in späterer Sicht. という論文には、後に旧制高知高校の教え子だった細井宇八氏(徳島出身)による訳が出ている(『危殆の士 ある同時代の人の判断と後世から見た菅原

<sup>6</sup> 『南溟』創刊号、1974年

<sup>7</sup> 『南溟』第15号、1987年

道真』、1991年)。

エーバースマイアーはさらに1996年4月に、「藤原保則伝」(三善清行著)を博士号請求論文としてフンボルト大学に提出している。これは翌年、*Japonica Humboldtiana* Band 1. 1997に掲載された。

細井氏によるエーバースマイアーの経歴は、以下の通りである。

1906年4月4日：ヴェストファーレン州、ビーレフェルト生まれ。4人兄弟の末っ子  
同地のRatsgymnasium卒業後、キール大とチュービンゲン大でドイツ文学とイギリス文学を専攻  
卒業後、ギムナジウム教師  
1935～36年：DAAD(ドイツ交換教授)として、イギリスに赴任  
1937年3月30日：Elise Beckerと結婚  
1939～41年：DAADとして、日本へ派遣される。高知高等学校へ赴任  
1941～45年：京都のドイツ文化研究所所長に赴任、研究所の運営の責任者となる  
1947～57年：ドイツ帰国。ビーレフェルトの母校Ratsgymnasiumで教鞭  
1957～65年：再来日。東京独逸学園校長  
1965～71年：ドイツ帰国。ボッフムのGoethe-gymnasiumで教職  
1965年～：Rotary Club Bochumに入会  
1971年から数年間：ボッフムのルール大学東亜科学研究室で日本学専攻  
1987年11月～12月：夫妻で高知高等学校創立65周年記念祭に来賓として出席。その後、徳島経由で、京都、東京を訪れる  
1989年7月：ボッフムのルール大学教授ブルーノ・レーヴィン先生の65歳誕生祝賀論文集に論文”Ein gefährlicher Herr”を寄稿。Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung 1989に掲載される。  
1996年4月：「藤原保則伝」(三善清行著)が博士号請求論文としてフンボルト大学の日本学紀要に掲載決定。翌年、*Japonica Humboldtiana* Band 1. 1997に掲載  
1998年1月17日：ボッフムの病院にて他界

ちなみに、彼には三人の子供がいた。長女 Christiane (1938～ ボッフム生まれ)、次女 (Sibylle 1941～ 軽井沢生まれ)、長男 (Vincent 1946～ 京都生まれ)である。ズィビレは高知にいた頃に生まれている。このズィビレ(ラウシャアー)はパッサウ独日協会会長を務めた人で、2004年に四国に来ている。

### 3. エーバースマイアーの見た高知

エーバースマイアーは、旧制高校教師時代の高知の印象について、1995年3月31日にボッフムでの聞き取りにおいて、こう述べている。

高知では私たちはたいへんうつくしい田園に住んでいました。隣はその学校のイギリス人教師でした。家の前には米とイグサを代わる代わる植える田圃がありました。イグサは11月から12月のはじめに植えられ、収穫後畳に加工されました。田圃の肥やしは私たちの家の汚物だめから取られていました。すべてが自然そのままだったということです。夏の夜には蛙の鳴き声がすごく、ほとんど眠れないほどでした。とても美しい時代でした。高知も都市化が進み、多くの田圃はコンクリートに席を譲ってしまいました。<sup>8</sup>

彼は当時の高知を「たいへんうつくしい田園」と呼んでいる。「田園」とはいえ、田んぼのことで、蛙の鳴き声に悩まされている。肥溜めのことも自然のままを受けとって、当時のことは「とても美しい時代」と回想している。彼は戦後ドイツに帰ってから、一度高知に来ていたので、ここではその現在との対比で当時の高知を思い浮かべることができたのである。

また、高知時代の回想として、二つのエッセイを『ボッフム年鑑』に発表している。まず同誌第七巻（1984年）（以下、BJ7と略す）では、高知高校の思い出が語られ、当時のドイツ人講師の仕事や高校の生活を報告していて、貴重である。生徒たちから「わが心、ハイデルベルクに失い」を歌ってくれと言われたエピソードなどが紹介されている。また「ライネケ狐」を鳥羽僧正の絵巻と比較してもいる。

まず、自分の仕事について、こう述べている、「二つの領域で活動した。一つは1939年から41年までの高知での日本の高等学校のドイツ語講師で、もう一つは1941年から45年までの京都の独逸文化研究所の所長としての活動だ」（BJ7, 353）とある。

さらに高等学校のことがドイツのギムナジウムと比較しながら、説明される。「当時の高等学校は、3年生で我が国のギムナジウムに相当する学校で、理系と文系（Sはサイエンス、Lは文学）に分かれ、さらに英語を第1外国語とするAとドイツ語を第1とするBのクラスに分かれていた。1939年の高知では入学試験に受かった300人のうち健康診断で最も健康であるとされた150人が入学した。ドイツ語は高校から、英語はすでに3年制の中学から始められていた」（BJ7, 353）と、その頃の高等学校のシステムとドイツ語履修のことが触れられている。

高知については、「当時の高知は美しかった。松や杉の上に白く浮かぶお城が空にそびえていて、広い校庭では教練将校か剣道をする若者たちの叫び声が時折こだまし、4月にはまだ咲いていないが、白くてゆったりとバラの生垣に囲まれていた」（BJ7, 353）と高等学校の校舎や周囲の環境がまさに田園であるかのように描写している。

外国人講師の勤務については、こう述べられている、「2～3年の任期で（延長は可）の契約で、授業のほかに試験採点や生徒の作文添削が義務付けられていた。さらに契約

---

<sup>8</sup> 荒井、前掲書、212頁

外だが、日本人の同僚への語学上の助言、とりわけ翻訳の手伝いがあった」(BJ7, 353)。

外国人講師としての境遇については、「思想言論に関しては外国人講師には制限があった。ホスト国の政府を批判することは許されなかった。『政治の話は決してしてはいけない』というのはイギリス人の同僚が最初に教えてくれたことだった」(BJ7, 354)とあるように、日本の政治に批判的態度はとれなかった。また「彼によると、前任のドイツ人講師は、中国への武力による侵略のことで政府批判したために再任されなかった」(BJ7, 354)というエピソードも紹介している。ただしこの場合は年齢の問題もあったかもしれないと付け加えている。

他方、彼ら外国人講師の思想的信条としては、「国家社会主義の熱心な信奉者と違って、ドイツ人講師の多くは私が知る限りでは、リベラルだった—その民主的自由主義的手本に従って」(BJ7, 354)とあるように、リベラルだったとされる。<sup>9</sup>

ナチスの人種政策にも批判的だったことがうかがえる。「ナチの人種イデオロギーは別の人種の世界であるという現実を前にして、カイザー・ヴィルヘルム研究所の生物学者だった日本人とのハーフのひとが1933年後『ニュルンベルグ法』によって職を失い、日本にやってきてドイツ語講師になった」(BJ7, 354)と述べていることは、ナチスの人種政策に対して、日本では比較的ユダヤ人には寛容だったことの一つの証になっている。

生徒たちについてはこう述べている、「生徒たちは自由を愛し、長髪、折った帽子、マントが抗議の印で、『ファイアーストーム』という集団ダンスや気に食わぬ教師に対する生徒の抗議運動を時折行った」(BJ7, 355)。ここからは、高知高校の反骨精神旺盛な風潮・思想的傾向がわかる。これに対して、1925年当時のゴットロープ・ボーナーの著書『東アジアへ』の中に掲載された高知高校の教室風景では、学生たちはスポーツ刈りだったので<sup>10</sup>、この間に学校の雰囲気も変わってしまったのかもしれない。

図書室のことではその蔵書を紹介している。「同じ校舎にあるよく利用される学校図書室にはドイツの高校よりかなり多くの蔵書があった。ドイツ文学の本もあった。ここではいくつかのドイツから亡命した作家たちの作品もあった。生徒や教授たちはドイツの現代文学ではヘルマン・ヘッセやトーマス・マン、ライナー・マリア・リルケ、ハンス・カロッサにおそらく最も興味を示した」(BJ7, 355)という。図書室に置かれた本はこのようにドイツの高校より多く、そのうち現代小説の中にはヘッセ、マンなど反ナチ的なものもあった。

生徒たちにはドイツと言え、音楽や医学、文学とともに哲学が思い浮かんだ。「ドイツには個々人が哲学者、日本では哲学者といえ、カント学者」(BJ7, 356)と述べている。日本のドイツ受容の特徴として、カント信奉、ゲーテ信奉があったことがわかる。

教室の様子としては、以下のエピソードが紹介されている。「授業では黒板に生徒か

<sup>9</sup> ただ、これが書かれたのが戦後であるため、エーバースマイヤーとナチスとの関係については、後述するように、日本でも親ナチス的活動をしていたので、鵜呑みにすることはできないだろう。

<sup>10</sup> 参照、依岡隆児『四国グローバル～日本とドイツの文化交流から～』リーブル出版、2015年、98頁



らの匿名の要望、特に音楽方面での要望が書かれた。『どうか「わが心、ハイデルベルクに失い」を歌ってください』といったことが黒板に要望として書かれた。ついでに『その愛はハイデルベルクでは今日どうなっていますか』という問いも」(BJ7, 357)。ハイデルベルクへのこうした愛着には、当時人気だった「アルト・ハイデルベルク」の演劇の影響もあったはずである。「わが心、ハイデルベルクに失い」は1923年の流行歌で、ミュージカル化され、さらに戦後には映画化された。

1940年4月のこと、高知高校に総領事館からヒトラーの肖像写真が送られてきた事件があった。計画されている有名人のサインの展示会に使ってくれという添え状が付いていた。しかし実際には、そんな計画などなかった。頭のおかしな学生があちこちの有名人の住所を聞いていたのだが、その学生のしわざに違いなかった。結局、ヒトラーの写真は図書館の閲覧室に、二匹の豚の美しい絵の隣に掲げられることとなった。後になくなったが、ドイツ降伏後はずされたか、空襲の犠牲になったかだろう(BJ7, 360)と述べられている。ここからは、高知ではナチスにはさほど影響されていなかったことがわかる。

高校における人間関係をしのぶエピソードもある。1946年に京都で高知高校の教え子に会う。そのあと彼からもらった手紙は、別れと再会が彼をいかに強く感動させたかを物語るものだった。エーバースマイアーは外国人も入る儒教的な子弟関係が健在であることを感じ取っている。内容は戦争で国と人の関係は変わったが、子弟関係は変わらないと述べる。その手紙にはさらに、高知の町が半分焼けてしまい、高校も火事で破壊され、いくつかの校舎が残っているだけだと書かれていたという。エーバースマイアーはここから師弟関係の強さ、教え子からの変わらぬ愛着を感じとっている。国力とかイデオロギーといった抽象的なものでなくて、こうした人々の精神性や人間関係の細やかさを体験したがゆえに、日本が敗戦を乗り越えていく力を持っていると確信する。「この人間的な証拠であるこの手紙は1948年にフランス人が日本について報告したことを裏付けるかのように思える。L' ame du vieux Japon a survécu a la defaite(古えの日本の魂は敗北を生き延びる)」(BJ7, 368)とこの文章を結ぶ。

同誌第15巻(1991年)(以下、BJ15と略す)に掲載された「台風と無駄に終わったプロパガンダ」にも彼の高知時代の思い出が語られている。1919年にナチスの役人ツェピーアが映画上映と講演のために高知にやって来たエピソードを、ナチス批判的に描いている。映画上映の機器の不調でうまくいかなかったことが、日独関係を象徴していると述べている。ツェピーアは親ドイツの雰囲気盛り上げるために講演と映画上演をするつもりだった。

このエッセイではエーバースマイアーは高知のことを「田舎」と呼んでいる。地方の小都市を軽くみていたところもあろうが、牧歌的で政治とは無縁ののどかな印象を高知に対して抱いていたことがわかる。この「田舎」では、こういう政治的なことは除外し

て、できたらそっとしておいてもらいたいのに、とも述べている。だが戦時中でお役所がらみとあっては無視できない。当局の間人であり、高位にあるツェピーアが到着の時間を告げ、ホテルとホールを取るように言ってきた (BJ15, 297) と、エーバースマイアーはこのナチスの客人を徹頭徹尾いまいましい官僚主義的な存在として描いている。

ツェピーアが到着したときには映画はまだ届いていなかった。会場の手配は親ドイツ的な新聞社が手配した (BJ15, 298) という。あいにく台風が接近していた。

中学校の講堂を借りて映画を上映することになったが、フィルムが届いていなかったり、警察で上映許可が遅れたりトラブル続きだ。ツェピーアの方は、じきじきに出向き警官のところで映画の許可を得ることとなる。

観客は天候のわりには多い。同僚は来ていない。そのころのナショナルな調子にはうんざりしていたのだ。それでも高校生もなんん人か来ていて、ツェピーアが演壇にあがると拍手していた。映画は「飛行士、無線通信士、砲兵 Flieger, Funker, Kanoniere」だった。しかし、映写機に不具合があった。外国映画と国産の器具は調和しなかったわけだ。これは独日の状況を象徴している、象徴をまじめに受けとめなければならぬとすれば— (BJ15, 299) とエーバースマイアーは皮肉を言っている。ここでは、Inakaprojektor という言い方が古い映写機が牧歌的で平和主義的な当時の高知の雰囲気象徴している。

映画のおかげで会場が笑いに包まれる。しかし観客は礼儀正しかった。第一部は上映したが、台風のため第二部は上映できず、閉会となった。(BJ15, 300)

ツェピーアはこうした運営のあり方を「怠慢だ」と述べる。このような状態のときに映画を送ってくるとは、と憤慨して引き上げるが、彼の帽子が風に飛ばされ、腕に挟んでいた映画が溝に落ちる。「くそ映画め」(BJ15, 301) といったかどうか……とエーバースマイアーはツェピーアに対してはあくまで皮肉っぽい言い方をしている。

その夜のこと、筆者の家でノックがしたので見ると、外に笑っている男が立っている。隣の英語講師ピルバーがそのことを知らせてくれる。その男は電報を持ってきたのだった。(BJ15, 302) なんと、それはツェピーア宛てだったものが、間違っってここに届いたのだった。リーザという人が自分はドイツ人であることを証明しなくてはならなくなったという。彼女は彼の妻の姉で、結婚のため役所に出す書類が必要だったのだ。アーリア人種であることを証明するものを取り寄せたのだが、ツェピーアはそれを間違っって荷物に入れてしまっていたのだ。(BJ15, 306)

台風一過の朝。「この国の人びとの明るさはどこからくるのかわかる。繰り返し襲ってくる自然のカタストロフを無事やり過ごしてきて、生き残ってきたがゆえだ。災難に遭って、幸いにも生き残ったときほど精神を高めるものはない」(BJ15, 305) と高知の風土と人間の関係について考察している。台風などの自然災害に常にさらされて生きているのに、人々は明るい。その理由がこの台風の過酷な体験を通して理解できたという。すなわち、自然災害によって人々の精神は高められてきたのだと。

さらに最後の段落でも、この地の人と風土を、愛着を込めて描いている。田んぼの向こうの隣家で戸が飛ばされ、それがエーバースマイアーの家の庭に発見された。私が「あの音は何？」と尋ねると、その隣人は「遠くを指さし、『海ですよ』と言う。10キロ離れているのに、風のため海がうなり、岩をも揺るがす力が岸に打ち寄せる音はるか遠くから聞こえてくるのだった—静かの海。そう海は言われているのだが」(BJ15, 307)と、この文章を結ぶ。

このように、「田舎」町・高知に身を寄せていたエーバースマイアーは、ナチスの高官を迎える際にそこに定住した者の側の視点からそうした出来事を冷静に見ていた。彼の共感はナチスや官僚主義的な政治にはなく、大きな自然の中に生きる「田舎」の方にあつたことはあきらかだろう。

さらに、戦後彼は田辺元を北軽井沢に娘と教え子とともに訪ねたと、同じく『ボッフム年鑑』第5巻(1982年)にエッセイで書いている。ただ、エーバースマイアーは戦時中にナチスのプロパガンダにも一役買わなくてはならなかった。阪神ナチス婦人会の依頼で本を編集していたのである(『戦時下の詩人の言葉』Dichterworte im Kriege. 1942)。

また、『自由の空に 旧制高知高等学校学校外史』に、彼は「高知高校での出会い」という一文を寄せている。だがここではもっぱら同僚たちの思い出を語っているばかりで、高知の土地のことはあまり出てこない。これは同窓会の記事という性格上いたしかたないことではあるが、先述したゴットロープ・ボーナーの記録とは大いに趣を異にしている。その同僚たちとの交流という点でも、淡い交わりという域を出なかったようである。

同僚教授の諸氏が歴史の中をどう歩いて行こうとしているか、何はさて置き、この人々自身のもつ歴史について、私は何も知らなかったし、大部分の人とは、その後の三年間も互に黙って毎日お辞儀するか、昔習ったドイツ語を改めて思い出そうとする人々とは Guten Morgen. や Guten Tag, wie geht es Ihnen?の挨拶を交す程度の交わりを出なかった。<sup>11</sup>

戦時体制に突き進む時代の空気ということもあつたのかもしれない。ゴットロープ・ボーナーの大正から昭和にかけての時代とは随分異なっていたとしても、致し方ないだろう。

独逸文化研究所で、京都の独文学者・成瀬清(無極)らとも交友関係があり、ナチスとは一線を隠していたという。ナチス親派のデュルクハイムの講演をいやいやながら認めたというエピソードも残っている。だが、教え子たちの証言では、旧制高等学校時代

<sup>11</sup> 『自由の空に 旧制高知高等学校学校外史』、前掲書、337～338頁(大和啓祐訳)

の彼は「ときどき『ハイル・ヒトラー！』なんてやっていたよ」「昭和14年始めになって、ヒトラー・ユーゲントのちゃきちゃきというので」来たと言われている。<sup>12</sup>

1989年発表の“Ein Gefährlicher Herr”. Sugawara no Michizane im Urteil eines Zeitgenossen und in späterer Sicht. (『危殆の士 ある同時代の人の判断と後世から見た菅原道真』、1991年)も、高知とのつながりがあった。

この論文は、死後、同時代人からは復讐の雷神と恐れられていた菅原道真が、後世、博愛的な天上の存在に変わり、あらゆる怨恨と憎悪を克服することを求めることにおいて、今後とも特殊な価値を持つとして、道真伝説を時代ごとに検証し、その根底にある日本人に顕著な、死者との関係、畏敬と崇敬の念を明らかにしようとしたものである。江戸時代の「菅原伝授手習鑑」や昭和初期の国粹主義的文脈での評価なども検証している。

彼が道真に興味を持ったのは、ドイツ語教師をしていた高知時代、建国記念日に道真伝説を知ったためだった。潮江天満宮（「天神様」）に同僚に連れて行かれ、そこで高等学校の生徒が試験の苦しみの助けを求めているのを見ている。高知での当時の道真像は、軍国主義的だが、人々の道真観は「学問の神」だった。このように、時代による評価の変動、ならびに高知において庶民信仰（遠流への流摘者への同情、死者への畏敬など）が政治的思惑と並存していたことが、エーバースマイアーが道真に興味を持つきっかけだったのである。

おわりに

以上、本稿ではドイツ語講師として四国に滞在したドイツ人ベルント・エーバースマイアーについて調査し、考察してきた成果を報告してきた。

エーバースマイアーは日本についての記述・インタビューのみならず日本研究の業績も多く残していた。そうした彼には家族とともに2年間を過ごした四国・高知への愛着がうかがえる。そればかりか、彼の日本研究のそもそもの出発点はそこにあったのである。四国高知についての回想をいくつも残し、当地を懐かしみ、日本人の教え子たちとの交流を生涯たやすことがなかった。彼はこうした愛着から後半生においては日本学研

---

<sup>12</sup> 同書、179頁。なお、エーバースマイアーが後に所長を務めた独逸文化研究所の雑誌『独逸文化研究会年報』1940年～42年 (Berichte der Deutschkundlichen Arbeitsgemeinschaft im Deutschen Forschungsinstitut Kyoto) には、高知時代にすでにエーバースマイアーも「高知高等学校講師」として「映画と演劇」という記事を投稿している。雑誌全体の目次の題名を見ると、第1巻(1940年)に「ニーチェとナチスの歴史観」(若林光夫 [第三高等学校教授])や「獨逸第三国家の演劇」(杉野昌甫 [上智大学教授・早稲田第一高等学院講師])、第3巻(1942年)に「獨逸の国防国家」(黒田覚 [京都帝大教授])や「ナチス政策に於ける人間的立場」(中川興之助 [京都帝大助教授])などがあり、ナチスに迎合しているような記事も見られる。

究に精進できたのである。彼の目を通して徐々に戦時体制になりつつある地方都市の状況を知ることもできよう。

一方で、彼自身が政治的・公的な存在と私的な存在の二面性を抱えながら生きざるを得なかったことを知ることもできた。戦争前の日本の地方都市にあって微妙な立場に置かれた外国人の目を通して迫りくる戦争の姿を垣間見ることもできる点で、彼の残した四国高知の記録は貴重であるといえよう。「異文化から照らし出され四国」の例として価値があるものと思い、ここに報告した。